

祖父・鈴木三重吉と『赤い鳥』

鈴木潤吉 区民ひろば千早 2023.1.22

明治 15 ～ 昭和 11 (没 53 歳)

0. 広島市紙屋町、中学まで広島

1. 漱石門下の小説家

- ・一番弟子「四天王」の一人
- ・作風「花魁^{おいらんうれ}憂い式」

2. なぜ『赤い鳥』を創刊したのか？

すず伝説

3. 雑誌名 なぜ「赤い鳥」か？

4. 三重吉と北原白秋

大の仲良しであったが・・・。

5. 「芸術として価値ある純麗な童話・童謡」

では、三重吉の言う「俗悪な」読み物とは

6. 有名作家の原稿に手を加えた ^{すいこう} 推敲魔

7. 『赤い鳥』は童話・童謡だけではない

・元祖 子どもの総合教養雑誌

8. 子どもの綴方、自由詩、自由画の投稿欄

例) 豊田正子の綴方→映画化「綴方教室」1938

^{かいたつきみこ}
海達公子の自由詩

金子ていの自由詩

9. 教育者としての三重吉 - 綴方指導

- ・三重吉は綴り方を「人間教育」と考えた
- ・『綴方読本』について川端康成が高く評価
(赤い鳥昭 11 年 6 月号に川端の書評)

10. 「騎道少年団」の創設 (昭和 3 年)

心身鍛錬、世界初の試み？

11. 「赤い鳥」の購読者

- ・教師、教育意識の高い父母の支持
- ・読み聞かせ、回し読みで貧しい家庭の子へ
例) 豊田正子



大正 10 年 妻・楽子, 珊吉, すず, 三重吉

12. 事業家としての三重吉

- ・赤い鳥音楽会・児童自由画展覧会
- ・童謡のレコード
- ・赤い鳥児童歌劇団、歌劇学校の構想
- ・「総合プロデューサー」(すず伝)

13. 発行元「赤い鳥社」とは？

- ・自家営業、そして赤字経営

14. さまざまな継承

例) 旧宣教師館で「おばあちゃんのおはなし会」

- ・「ひかり文庫朗読会」録音図書
- ・由紀さおり姉妹の童謡
- ・フォークグループ「赤い鳥」
- ・『赤い鳥事典』(柏書房) など

15. 広島の赤い鳥文学碑

「私は永久に夢を持つ たゞ年少時のごとく
ために悩むこと 浅きのみ」

お墓 広島市 長遠寺 (じょうおんじ)

つと早く注意を向けなければならぬ。子供たちが自分等の日常使つてゐるよりの言葉で、ものをかくといふことは、丁度われわれが外國語を考へて、話すのと同じやうに、言はうとすることを、一々翻譯しつつかいて行くわけで、それが少くとも年少の子供には、どんなに多大の権柄であるか分りません。對話を寫實的に生かすといふ手段としてばかりでなく、それ以外の地の文でもかまはず、どん／＼方言でかゝるのが一等いゝのです。さうすれば、言はうとすることがすぐ直接に表はされて行くわけです。年級が上れば、だん／＼に標準語も、より自由におぼえて來ますし、又、そのときになつてから、特に標準語へ導くやうに扶掖してもおそくないので、便宜上、しばらくは何にも干渉しないで、無條件に、すべて方言でかゝせること

仔牛

下關市西ノ端町商品館内

金子みすゞ

ひい、ふう、みい、よ、踏切で、
みんなして貨車をかすへてた。
いつ、むう、な／＼、八つ目の、
貨車に仔牛が乗つてゐた。
賣られてどこへ行くんだろ、
仔牛ばかりで乗つてゐた。
夕風冷たい踏切で、
みんなして貨車を見おくれた。
晩にやどうして寝るんだろ、
母さん牛はるなかつた。
どこへ仔牛は行くんだろ、
ほんとにどこへ行くんだろ。

赤い鳥とわたし 豊田正子

「日本児童文学」一九九八年七・八月号(抜粋)

にいいことがあった。十一歳(四年生)になった時、私の書いた綴方が「赤い鳥」に載った。教科書以外、何ひとつ買つてもらつたことのない私の手に、夕夕で渡されたのだ。うれいような、はずかしいような不思議だった。クラスには「赤い鳥」の年間購読者もいて、毎月「赤い鳥」を手に入れている生徒がいた。しかし、私はただの一度もその人たちをうらやんだことはない。自分の綴方の載っている「赤い鳥」を、ときどき渡されるだけで、充分すぎるほど満足してあわせた。赤い鳥は私に、自分の言葉を文字にする努力のむずかしさと楽しさを教えてくれた。「赤い鳥」には私の一家の貧しさを、まったく気にしなくてもよい、暗れ暗れとした自由な境地があった。「赤い鳥」に綴方をよせる全国の子供たちは強い方言を気にしなくてよかつた。理解しにくい方言に、標準語のルビがふられてゐるのを見た時、私は子供心に非常に感動した。私たちが子供は、どんな言葉で綴方を書いてもいい。「赤い鳥」は受け入れてくれるのだということが分つたからである。私の内には、「赤い鳥」によつて生れた、いつでも自分の言葉で綴方を書く、書ける、という正公という少女が住みついている。素直で率直な、可愛い少女である。丸六年間という入院生活の中で、正公はいつも私をばげまじつづけてくれている。

小学校を終えるとすぐ、私は町のレース工場の女工になつた。表向きの私の周囲には大人の女工さんたちの歌う流行歌が楽し気に機械音にまじつて飛び交つていたが、綴方の正公は「赤い鳥」に発表された童謡に曲がついた歌を、同じ年輩の女工仲間に使えては歌つていた。

豊田正子(大正十一年〜平成二二年) 随筆家

映画「綴方教室」(高峰秀子が主演)

戦後、日本エッセイストクラブ賞受賞

